

文化祭異聞

文化祭はもちろん生徒主体の行事だから、教員はほとんど表面に出ない。その例外が、いまやメイン企画扱いされる「教師演芸会」で、すでに三〇年近い歴史がある。ところでここ数年、教員有志とPTA有志の企画・展示がちょっとした注目を浴びている。

(山内)

「私たちはチエルノプリを知っているか」

教員有志の展示は、昨年の「パレスチナ写真展」(企画・山岡幹郎)について二度目。チエルノプリ原発事故から一三年。今でもその後遺症は続いている。そのような状況のなか、NGO団体「チエルノプリ子ども基金」から救援のためのチャリティー・コンサート開催の要請を受けて、教員有志(堀川禎一・増子寛・山岡幹郎)と文化祭実行委員会運営部門の共催という形で企画された。フォト・ジャーナリスト広

河隆一の写真を中心とする教室展示と、広河隆一のスライド・トーク、ナターシャ・グジー(一九歳・六歳の時、原発事故に遭う)の歌と踊りを中心とする講堂でのチャリティー・コンサート。

主催者の一人、山岡は語る。「この企画にかかわったものとして、いま思うことは、ひとりの人をとおして事柄を知るといふことの大切さです。確かにさまざまな本や資料によって私たちはその事柄を知ることができませんし、その努力はつとしなければならぬはずですが、しかし、生身の人、その人の声をおして知らされる事柄の重さは、私たちがのやもすれば乏しい想像力をいやおうなく突き動かすことがあります。……この企画に関わってくれた生徒諸君が、将来なんらかの形で、ナターシャにふれた今回の経験を活かしてくれることを願っています。」

なお、コンサート入場者は



約五〇〇人。入場者、教職員、労働組合などから寄せられたカンパは総額約五〇万円だった。

「麻布発見」

PTA有志による展示は四年目。内田前PTA会長はその動機について次のように語る。「学内ではPTAを含め、父母の自由な発言の場がない。普段タブーとなっていることも、批判を恐れず自由に出せる場を作りたい。発言の場がなく、情報不足、あるいはウワサに流され不安になる父母たちのなかに風穴を開けた。生徒たちに父母の考えを、互いにつづかる覚悟で出してみたい。」

「麻布発見」というネーミングは、「お互いに異なる自由な意見を、本音でぶつけ合うことこそ各自にとっての発見であり、将来への可能性となる」という意味。だとか。

テーマは、「親の言いたい放題」「親のこだわり」「麻布の尺度」と推移し、今年再び「親の言いたい放題」。麻布に対する辛口批評だったり、時には「麻布賛歌」になったりしながら、あやういところでバランスをとり続けようとしている。

麻布PTAは、発足当時の経緯から、役員の権力化を避けるために、毎年改選される。



しかしその理念が短所として現れる場合もある。継続性の問題だ。運営さえ間違わなければ、この「麻布発見」はその短所をおぎなう要素になる可能性をもっている。

廊下はまだ展示された「麻布川柳」のユーモアにつられてか、入場者は幅広く、会場のノートには、親ばかりでなく、OB、在校生、小学生、他校の女生徒などの感想がたくさん書き記されていた。